福岡市埋蔵文化財調査報告書　第501集

麦野C

―― 第3次調査報告 ――

南八幡

―― 第6次調査報告 ――

1997

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第501集

麦野C

―― 第3次調査報告 ――

南八幡

―― 第6次調査報告 ――

1997

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内においても重要な地域として多くの人に知られています。

近年、市内南郊においては再開発が急速に進み、発掘調査の件数が増えつつあります。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は麦野C遺跡第3次調査、南八幡遺跡第6次調査の成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表す次第であります。

平成8年11月22日

福岡市教育委員会

教育長　町田　英俊

本　文　目　次

第一章　南八幡遺跡、麦野Ｃ遺跡周辺の歴史的環境 ……（宮井善朗）…1
第二章　麦野Ｃ遺跡第３次調査 ……（宮井善朗）　3
　１.調査に至る経緯 ……3
　２.調査体制 ……3
　３.調査の記録 ……3
第三章　南八幡遺跡第６次調査の記録
　はじめに ……（加藤隆也）　11
　調査に至る経緯 ……11
　調査の組織 ……11
　南八幡遺跡群の既調査 ……13
　調査の記録 ……13
　１）竪穴住居（ＳＣ）……13
　２）土坑（ＳＫ）……16
　３）小　結 ……19

挿　図　目　次

Ｆig.１　調査区周辺の遺跡（1／25,000）……2
麦野Ｃ遺跡第３次調査
Ｆig.２　調査地点位置図（1／4,000）……4
Ｆig.３　調査区位置図(1／400）……4
Ｆig.４　遺構配置図（1／200）……5
Ｆig.５　検出遺構実測図(1／60）……6
Ｆig.６　各遺構出土遺物(1／３）……7
Ｆig.７　包含層出土遺物１(1／３）……8
Ｆig.８　包含層出土遺物２(1／3・1／2）……9
南八幡遺跡第６次調査
Ｆig.９　調査地点位置図(1／1,000）……11
Ｆig.10　遺構配置図(1／100）……12
Ｆig.11　ＳＣ－０１実測図(1／40）……14
Ｆig.12　ＳＣ－０１出土遺物実測図(1／３）……15
Ｆig.13　ＳＣ－０２実測図(1／40）……17
Ｆig.14　ＳＣ－０３実測図(1／40）……17
Ｆig.15　土坑（ＳＫ）実測図(1／40）……18
Ｆig.16　ＳＣ－０３出土遺物実測図(1／３）……19
Ｆig.17　ＳＫ－０４出土遺物実測図(1／３）……19

図　版　目　次

麦野Ｃ遺跡３次調査

ＰＬ．１　（１）調査区全景（西から）　（２）調査区全景（北から）

ＰＬ．２　（１）住居跡１．２.土層（北から）　（２）住居跡１．２（北から）

（３）住居跡１．２（東から）　（４）住居跡２（東から）

（５）柱列１．２（東から）

南八幡遺跡６次調査

ＰＬ．３　（１）調査区全景（東から）　（２）ＳＣ－０１完掘状況（東から）

ＰＬ．４　（１）ＳＣ－０２完掘状況（東から）　（２）ＳＣ－０３完掘状況（南から）

ＰＬ．５　（１）ＳＫ－０１土層断面（南から）　（２）ＳＫ－０２土層断面（北から）

（３）ＳＫ－０３土層断面（南から）　（４）ＳＫ－０４完掘状況（北から）

ＰＬ．６　出土遺物

Ｐｈ.１　作　業　風　景

第一章　南八幡遺跡、麦野Ｃ遺跡周辺の歴史的環境

南八幡遺跡、麦野Ｃ遺跡は、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置する。地理的には春日丘陵の東辺のほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷が入り込んであり、数条の舌状台地状をなす。この舌状台地ごとに麦野Ａ～Ｃ遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡などに分けられているが、その地形的な境界は判然としない。今仮にＪＲ南福岡駅、ＮＲ雑餉隈駅周辺に展開する麦野Ａ～Ｃ遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡の総称として、麦野・雑餉隈遺跡群という名称を用いたい。以下この遺跡群の歴史的展開について略述する。

麦野・雑餉隈遺跡群で最も遡る遺物としては、麦野Ｃ遺跡１次調査地点で旧石器時代の石刃、剥片が出土している。後世の遺構の覆土からの出土である。

これに続く縄文時代の遺構、遺物についてもはっきりしない。麦野Ｃ遺跡３次地点（今回報告）では該期の石鏃が出土している。但しこれも後世の撹乱からの出土品である。遺構としては最近、麦野Ｂ遺跡３次調査地点で、該期の落とし穴ではないかという遺構が検出されているという。ただ時期を明らかにする遺物がまったく出土していないとのことなので、確定はできないようである。この他、縄文時代については晩期突帯文期に至るまで、確実な遺構、遺物に恵まれていない。

弥生時代に入ると、遺構、遺物とも増加が見られる。既に前期段階には、雑餉隈５次地点から住居跡（と考えられる方形土壙)、方形の貯蔵穴等が検出されている。中期段階にも同じく雑餉隈５次地点から、円形の住居跡が検出されている。住居の中には径８ｍほどの比較的大形のものを含み、また須玖遺跡群、岡本遺跡群にも近いことから、比較的規模の大きい拠点集落があった可能性もあろう。後期には雑餉隈５次地点では遺構が見られなくなり、他の地点でも遺構が希薄であるが、南八幡遺跡５次地点では、方形の住居が検出されている。

古墳時代に入っても遺構、遺物は不明な点が多い。とくに前期、中期の遺構、遺物は全くといっていいほど見られない。後期に入ると、南八幡遺跡２次、３次地点で住居跡が検出されている。隣合う調査区である２次、３次地点合わせて７期の住居が見つかっており、一定の広がりを持つ集落が展開していたことが推測される。しかしこの集落は奈良時代の大規模な集落には直接つながっていかないようである。

７世紀末から８世紀にかけては大きな画期である。雑餉隈遺跡９次地点では７世紀末ないし８世紀初頭に、方形の配置を持つ大形建物群が現れる。その規模と配置は官衙的性格を思わせるものがある。８世紀中頃から後半に至ると集落は遺跡群全域で爆発的に増加する。各遺跡群どの地点を掘っても、該期の住居に当らないことがないと言っても過言ではない。これらの住居は例えば雑餉隈遺跡５次、８次地点合わせて5200㎡の中に56基と、かなりの高密度で分布する。当然遺跡全体としては粗密はあったろうが、それにしても該期の村落景観は相当壮観なものがあったと想像される。この集住の契機としては大宰府、水城、大野城などの国家的規模の土木事業ないしはその維持、営繕に関るものと推測していたが、雑餉隈遺跡９次地点の大形建物の検出により、その可能性は高まったように思われる。但し、８世紀後半にはこれら国家的建築物の創建はほぼ終息していたであろうから、そのための集住とは考えがたい。

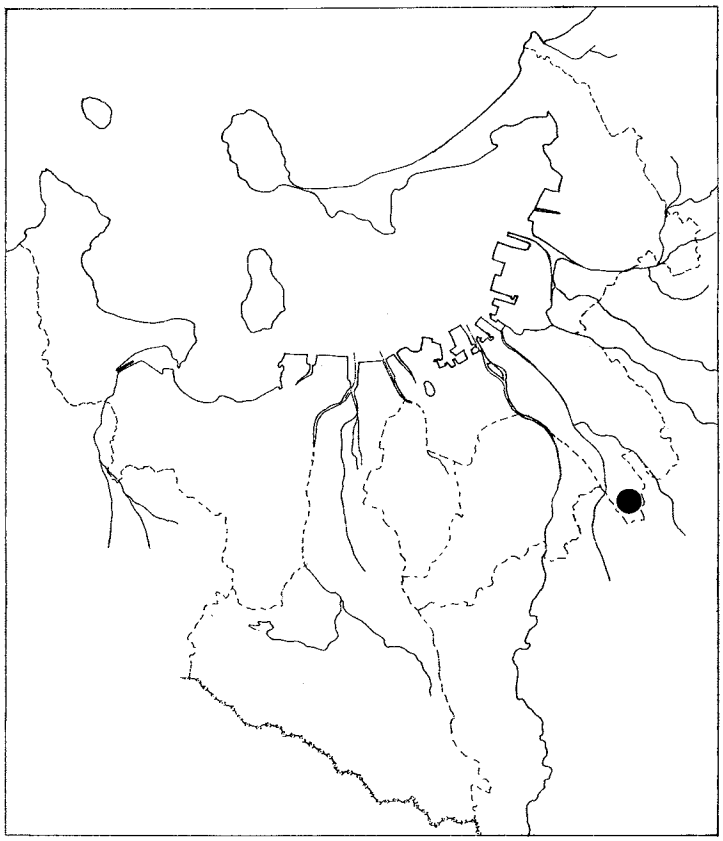
なおこれらの集落は９世紀に下る物はほとんど見られない。遺跡群内では麦野Ａ遺跡３次調査で井戸が１基見つかっている程度である。その後の中世前半期も遺構は希薄であるが、中世後半期では麦野Ａ遺跡１次地点で、15世紀代の集落が検出されている。

1．南八幡遺跡　2．麦野Ａ遺跡　3．麦野Ｂ遺跡　4．麦野Ｃ遺跡　5．井相田Ａ遺跡
6．井相田Ｂ遺跡　7．井相田Ｃ遺跡　8．仲島遺跡　9．三筑遺跡　10．笹原遺跡
11．諸岡Ｂ遺跡　12．板付遺跡　13．高畑遺跡　14．下月隈Ｃ遺跡　15．立花寺Ａ遺跡
16．立花寺Ｂ遺跡　17．金隈遺跡　18．影ケ浦遺跡　19．影ケ浦古墳群
20．堤ケ浦古墳群　21．持田ケ浦古墳群　22．御陵古墳群　23．須玖遺跡群
24．岡本遺跡群　25．雑餉隈遺跡

Fig. 1　調査区周辺の遺跡（1：25,000）

麦野C遺跡

第3次調査



遺跡略号　MGC－3
調査番号　9604

例　言

1．　本章は医院建設に先だって、福岡市教育委員会が1996年４月８日～４月19日にかけて行なった麦野Ｃ遺跡第３次調査の報告書である。麦野Ｃ遺跡としては361集につづき２冊目の報告書である。

2．　検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡１、溝２のように記述する。

3．　本章で使用する方位は磁北である。

4．　本章で使用した遺構実測図は宮井善朗、西村智道（現太刀洗町教育委員会）、井上繭子（現福岡市教育委員会）、野田和美、岡部裕子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

5．　本章で使用した遺物の実測図は宮井の他西村智道、井上繭子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

6．　本章使用の写真は宮井が撮影したものである。

7．　遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。

8．　本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。

9．　本章の執筆、編集は宮井が行なった。

第二章　麦野Ｃ遺跡第３次調査

１．調査に至る経緯

1995年12月15日付けで、戸早雅弘氏より、医院併用の自宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である麦野Ｃ遺跡内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて96年３月19日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、自宅併設ということから、一部補助金の対象として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1996年４月８日に着手し、４月19日に終了した。

２．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊
調査総括　埋蔵文化財課　課長　荒巻輝勝　第２係長　山口譲治
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基
調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗
調査作業　野村道夫　楠林司朗　森田祐子　古賀典子　持丸玲子　森園弘子　平田浩美　森山キヨ子　石川洋子　鍋山治子
調査補助　野田和美　岡部裕子　西村智道（現太刀洗町教育委員会）　井上繭子（九州大学、現福岡市教育委員会）
整理作業　西村智道　井上繭子　大石加代子　林由紀子　太田順子　武田祐子

また調査時には戸早雅弘氏に、多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	９６０４		遺跡番号	ＭＧＣ－３	
調査地地番	福岡市博多区銀天町３丁目14				
開発面積	472.07㎡	調査対象面積	320㎡	調査面積	242㎡
調査期間	1996年４月８日～４月19日		分布地図番号	12－0050	

３．調査の記録

今回の調査は、242㎡という狭い面積である。検出した遺構は、重複した住居跡２基、楕円形の浅い土壙２基、溝１条、ピット等である。ピットは列状をなすものも数列見られるが、建物を検出するには至っていない。遺構はいずれも奈良時代に属するものと考えられる。地山である鳥栖ローム面は、東側に向かってかなり急に傾斜しており、その上層に包含層が認められる。包含層出土の土器も、奈良時代に属するものであろう。

住居跡１、２（Fig.５）　調査区の西辺の中央付近で検出した住居跡である。検出時には１基の住居と考えたため、覆土から出土した遺物の取上げは分離されていない。ほぼ床面に近くなって、硬化面が段をなすことが判明し、２基の住居の切り合いであることが確認された。しかし覆土の土層観察によっても住居跡１の東側の壁ははっきりしない。**住居跡１**は西側の住居で、住居跡２を切る。床面は

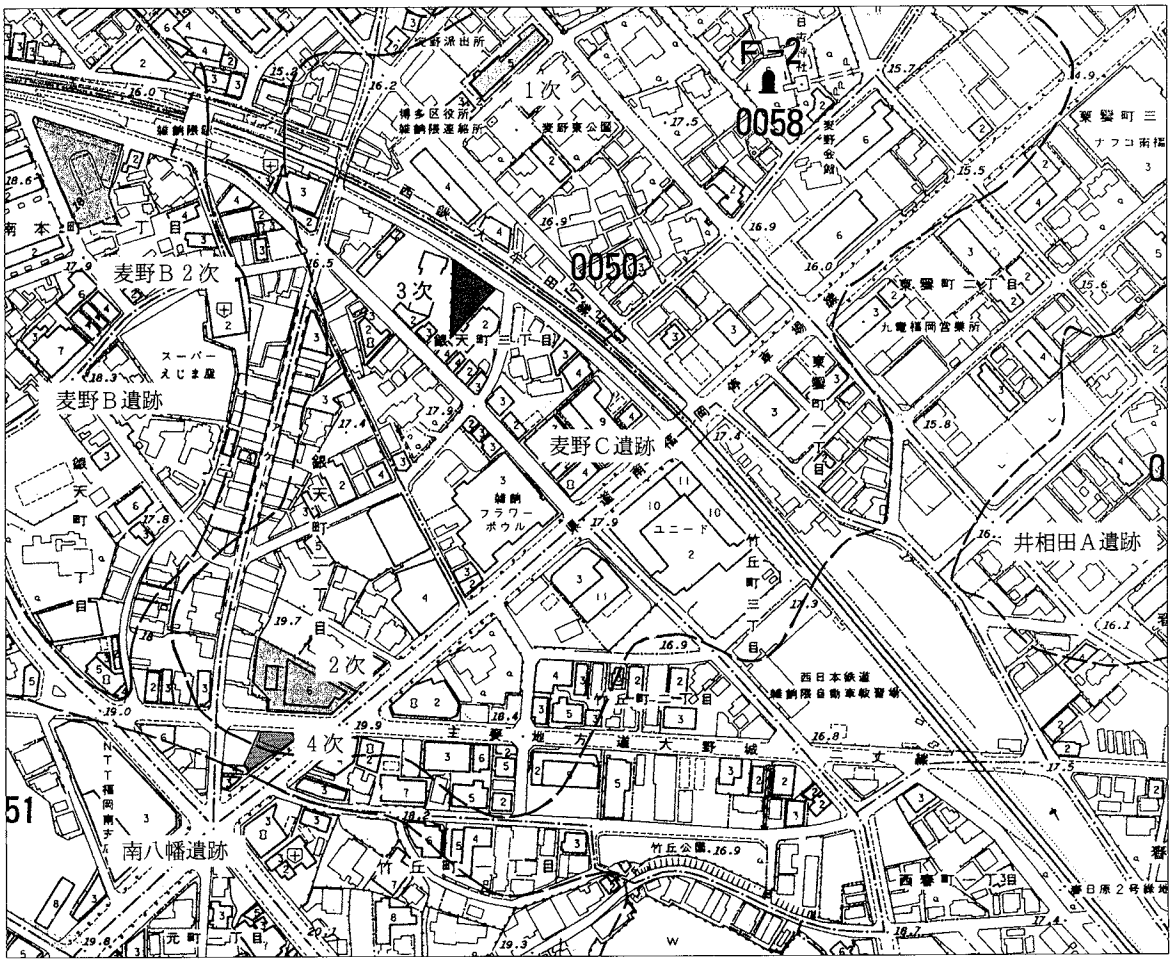


Fig. 2　調査地点図（1／4000）

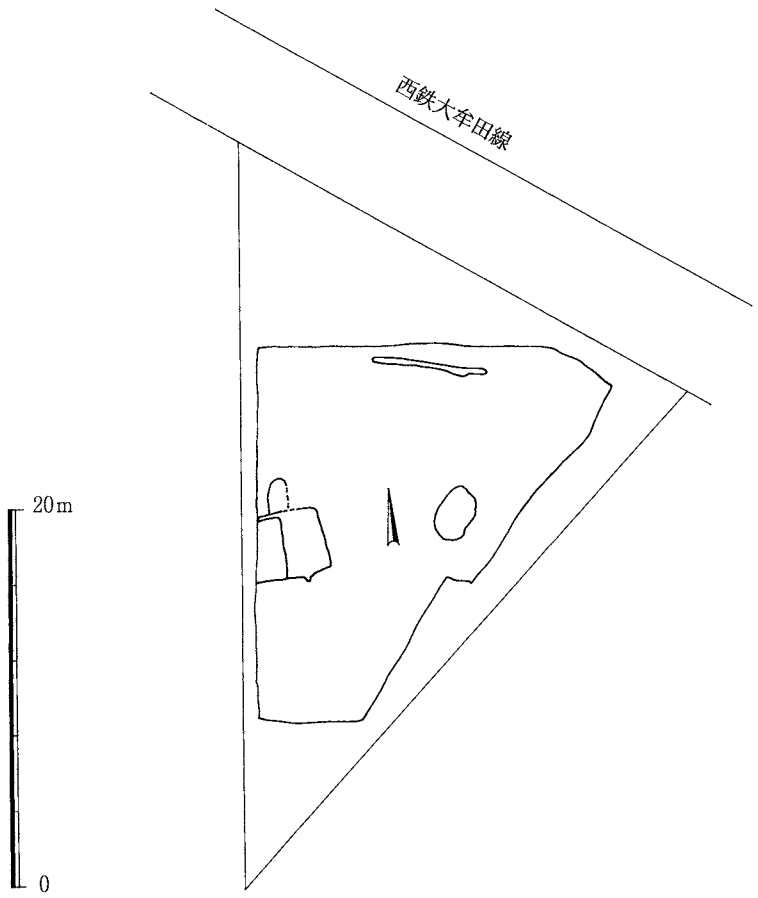


Fig. 3　調査区位置図（1／400）

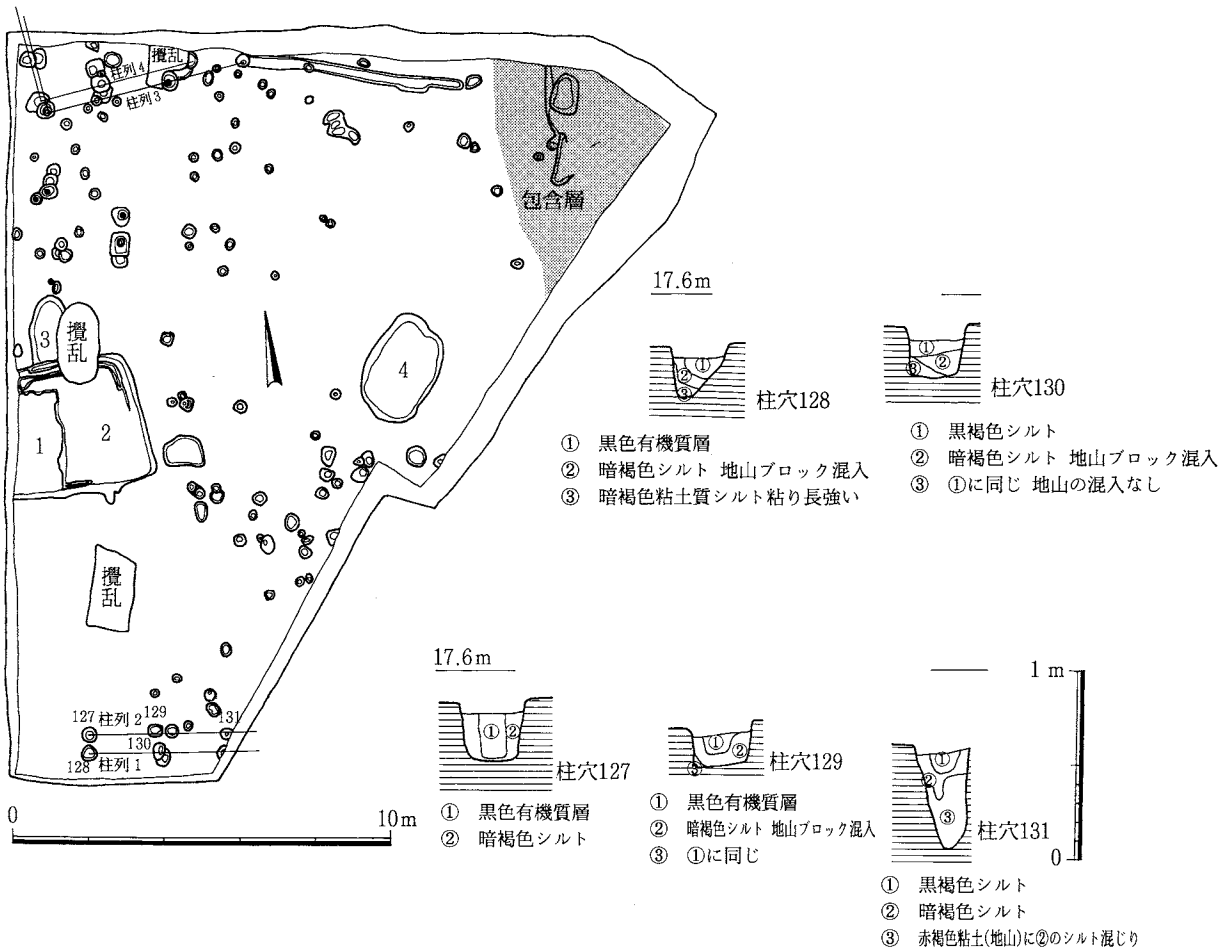
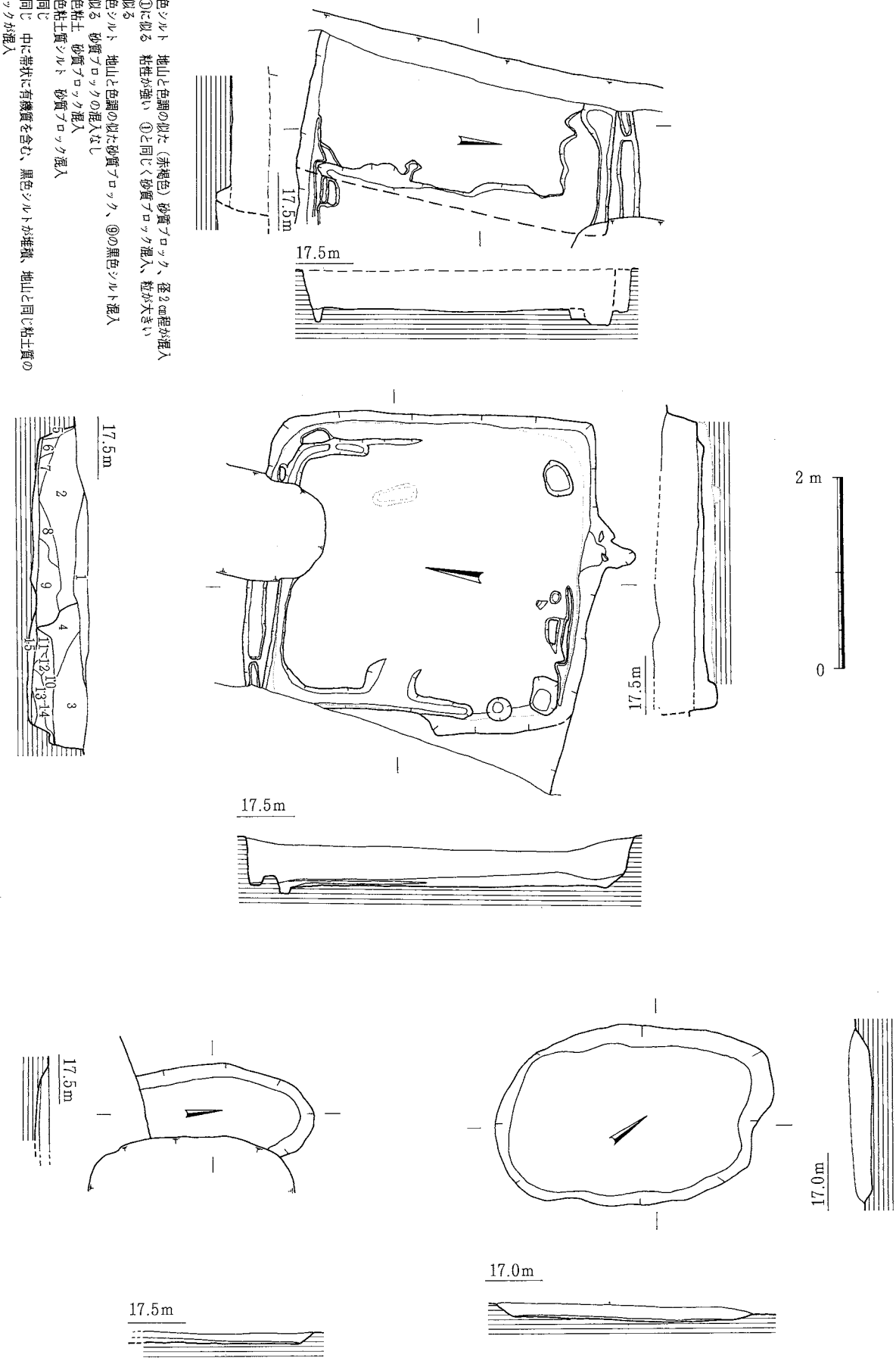


Fig. 4　遺構配置図（1／200）

住居跡2より高いため、住居跡2と切り合う部分はそれだけ厚い貼床をしている。東壁の位置ははっきりしないが、貼床の東限から程遠くない位置に想定される。土層では貼床の東限の位置に壁溝とも考えられる落ちこみが見られるが、それからの壁の立上りは明確ではない。北壁については、壁溝が2重になる部分があり、いずれかが住居跡1の壁溝と考えられる。図では住居跡2の北壁のつながりを考慮して、住居跡1の壁溝を内側と想定した。この復元では、一辺3.2mほどの方形となり、ほぼ住居跡2と同じ規模になる。**住居跡2**は一辺3.2mほどの方形を呈する。主柱穴は検出されない。南側にカマドを持つ。カマドの煙道が住居外へスロープ状に張り出している。カマド本体は破砕されており、白色粘土が散乱するのみである。10cmほどの貼床をした後に壁溝を切っている。

出土遺物(Fig. 6）　前述したような事情で、住居跡1と2の遺物は分離して取り上げられていない。とくに住居跡1に確実に属する遺物は不明である。確実に住居跡2に属する遺物のみ明記することとして、その他については一括して述べる。Fig. 5の1～4の須恵器、5の土師器が住居跡1、2出土である。1～4は高台付の坏である。いずれも底部から体部が緩やかに立ち上がる。直線的に伸びる1のようなものと、やや外反する2、4のようなものがある。高台は断面方形で、外傾して取り付く。5は土師器甕の口縁部片である。内面の口縁部以下にケズリを施し、明瞭な稜が立つ。6～12は住居跡2に伴う遺物である。6、7はカマド近くの床面から出土した遺物である。6は高台付の坏。底部は丸みを帯び、体部は緩やかに立ち上がる。高台は低く、外傾して取り付く。7は高台のない大形の坏。底部と体部の境付近に回転ヘラ削り後、焼成前の条線がある。8、9、12は土師器の小形甕。10、11は甑である。10は口縁部で、内面は削り。口縁端は直線的に伸びて徐々に薄くなる。11は把手である。出土した土器を見ると、大きな時期幅は認められない。

土壙3(Fig. 5）　住居跡2の北側で検出した。住居跡2に切られる。楕円形を呈する浅い土壙であ



① 黒褐色シルト　地山と色調の似た（赤褐色）砂質ブロック、径2㎝程が混入
② 色調①に似る　粘性が強い　①と同じく砂質ブロック混入、粒が大きい
③ ②に似る
④ 暗褐色シルト　地山と色調の似た砂質ブロック、⑨の黒色シルト混入
⑤ ④に似る　砂質ブロックの混入なし
⑥ 暗褐色粘土　砂質ブロック混入
⑦ 暗褐色粘土質シルト　砂質ブロック混入
⑧ ⑦に同じ
⑨ ⑦に同じ　中に帯状に有機質を含む、黒色シルトが堆積、地山と同じ粘土質のブロックが混入
⑩ 暗い赤褐色粘土　上方は固くしまる（M1床）
⑪ ⑨に同じ
⑫ ⑦に同じ
⑬ ⑨に同じ
⑭ ⑦に同じ
⑮ 赤褐色粘土　上は固くしまる（M2床）

Fig. 5　検出遺構実測図（1／60）

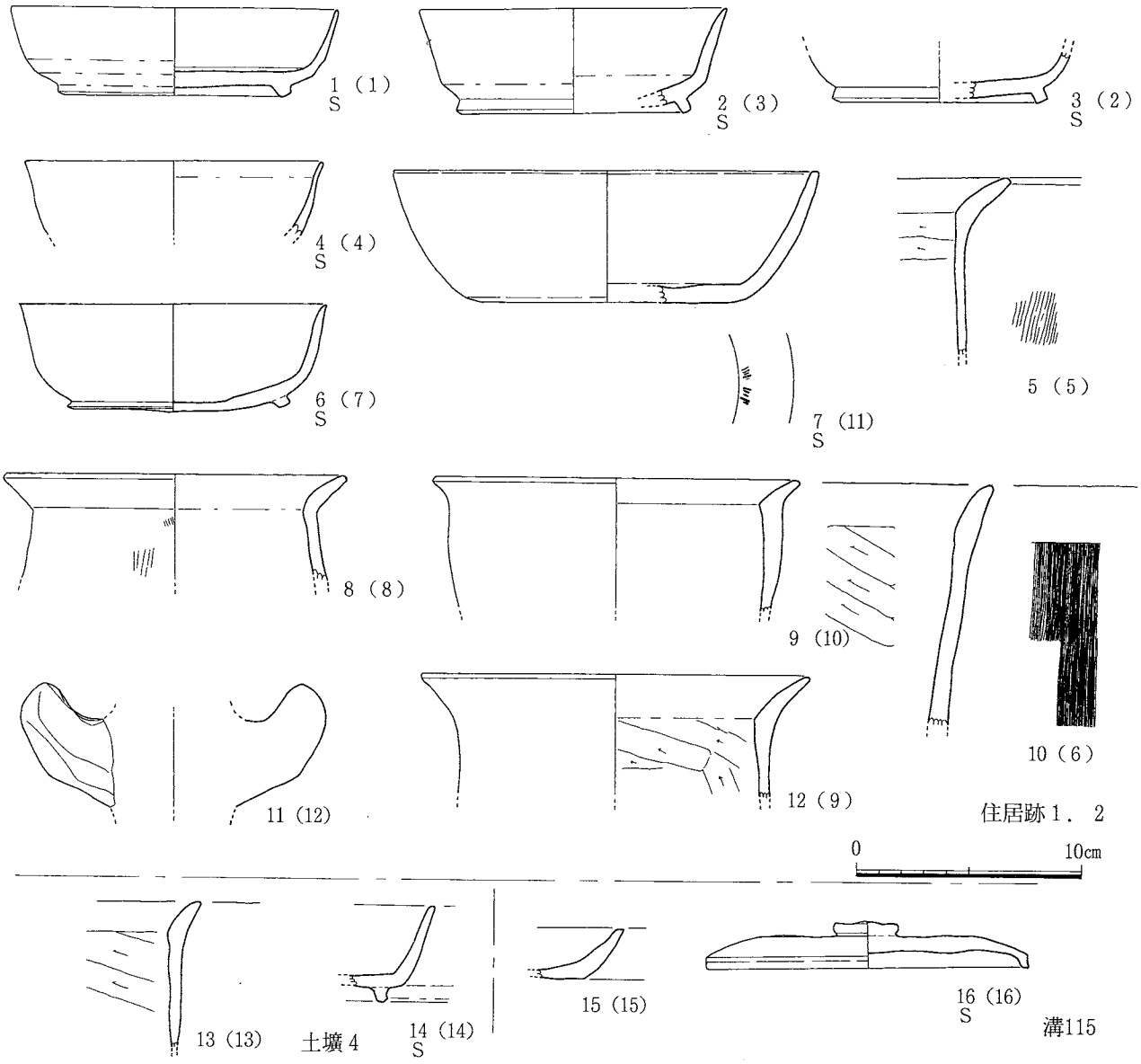


Fig. 6　各遺構出土遺物（1／3）

る。長1.8m以上、幅1mほどに復元される。現状での深さは10cmほどである。性格は不明であるが、後述する土壙4と規模、形状が類似しており、同様な性格の遺構と考えられる。出土遺物は小ポリ袋一袋と少なく、また図化に耐え得ないが、外面ハケメ、内面削りの土師器甕胴部片が出土している。

土壙4（Fig. 5）　調査区の東端で検出した。楕円形を呈する浅い土壙である。長2.7m、幅1.8mを測る。現状での深さは15cmほどである。土壙3よりやや大形と言えようか。

出土遺物(Fig. 6）　13は小形の甕の口縁部である。口縁部はほとんど外反しない。14は高台付の坏片である。高台は踏張り気味に外反する。住居跡出土のものに比べて焼成もよく、成形も丁寧な観がある。土壙3が住居に切られることからも、この2基の土壙は住居より古いものと考えられる。

溝115(Fig. 4）　調査区北端で検出した。幅30cmほどの溝である。調査時の深さは5～10cmほどであるが、北端では若干表土を深く剥ぎ過ぎているので、現状での遺存は20cmほどと考えられる。延長は5.6m以上を測る。奈良時代に属する。該期のこのような浅く、幅狭で比較的延長の長い溝は、雑餉隈遺跡5次、8次調査区に類例があり、そこでは延長50mに及んでいる。

出土遺物(Fig. 6）　15は明赤褐色を呈する土師器坏身である。器面は荒れているが、外面は回転ヘ

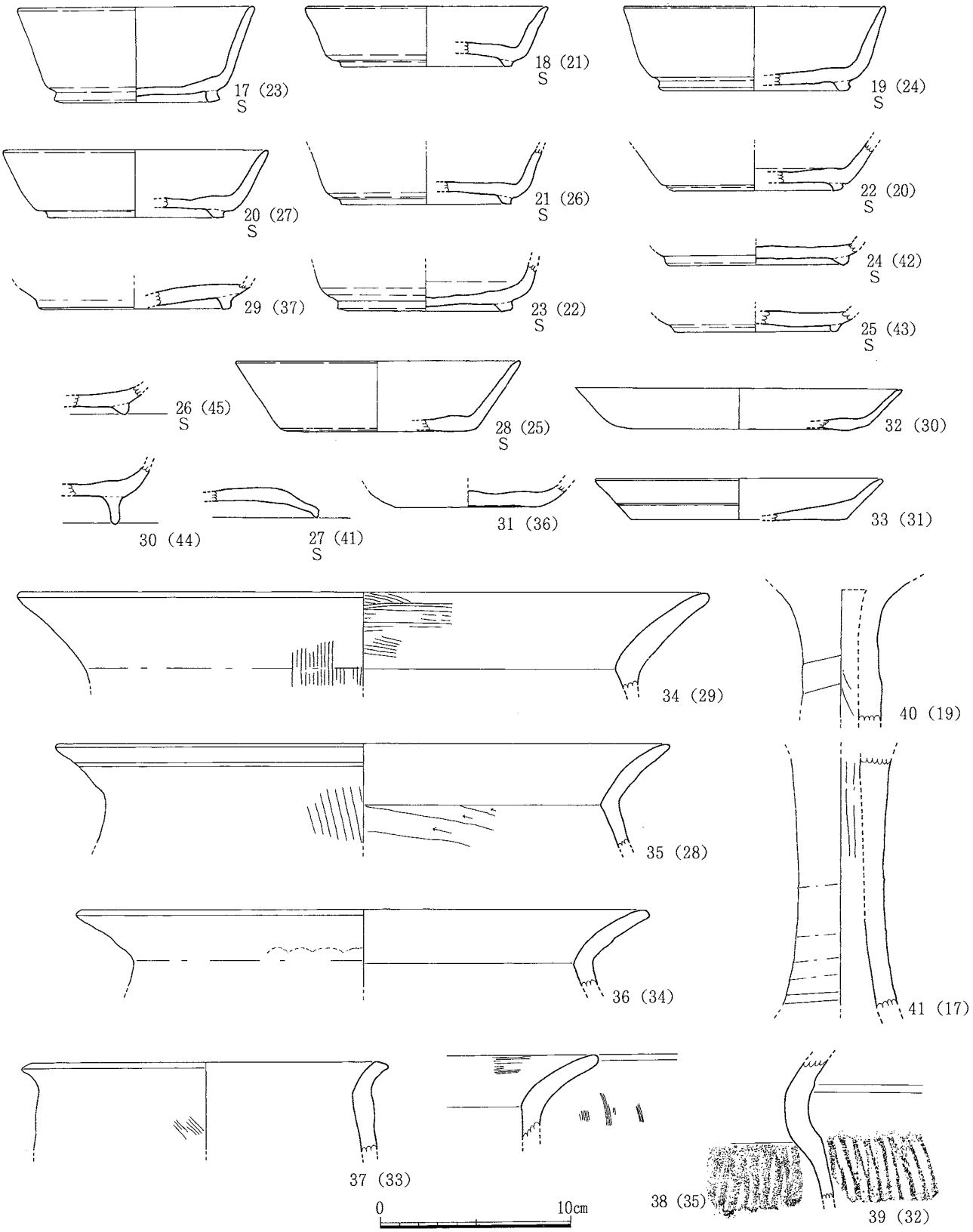


Fig. 7　包含層出土遺物１（１：３）

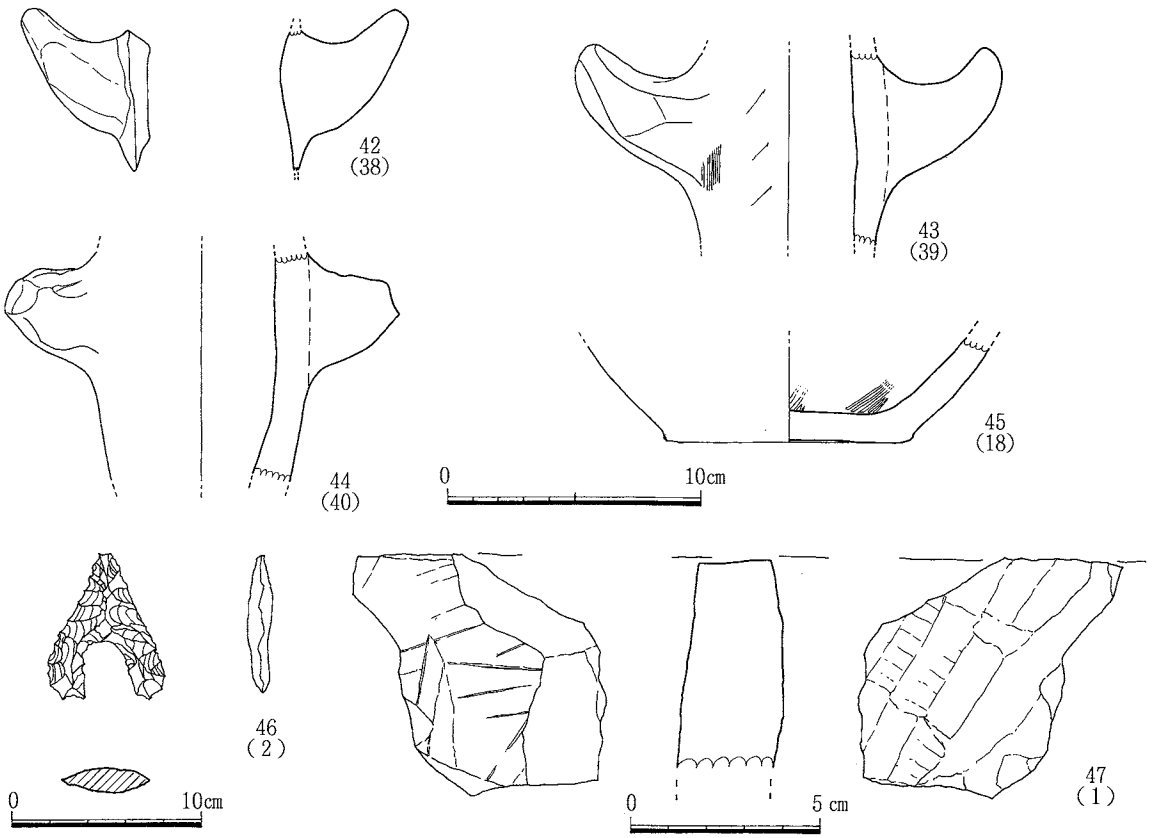


Fig. 8　包含層出土遺物２（１／３　１／２）

ラミガキであろう。16は須恵器蓋である。つまみは径が大きく、平たい。口縁端部は強く屈曲する。天井部に回転ヘラ削りを施す。

ピット　ピットは全体に散漫に検出しているが、詳細に見れば粗密がある。比較的集中しているのは、調査区南端部、土壙４の北側、調査区西北隅である。列をなすものも、図示したように数列見られるが、調査区内で建物として完結するものはない。柱列の中で、柱列３、４は建物の有力候補と考えられる。

包含層　調査区東北隅に、東側へ向かって比較的急な傾斜を持って地山ローム面が落ちていく部分がある。おそらくそのまま谷部へと落ちていくのであろう。この斜面の上層に包含層が形成されている。

出土遺物(Fig.７、８）　17から26は須恵器の高台付の坏である。口径11cmほどの小形品(17、18など)と、14cmほどの中形品(19、20など)があり、また17のような深いものと、18のような浅いものがある。高台は低く、華奢である。27は蓋の口縁部片である。つまみ部分まで遺存がなく、有無は不明である。口縁端部は短く屈曲する。天井部はヘラ削りの後ナデを施す。28は高台の無い須恵器坏である。体部は内外面とも回転ナデを施す。29は土師器の高台付坏である。器面が非常に荒れている。30も土師器坏。高い高台を持つ。内外面ともナデ調整。淡赤褐色を呈する。31は高台の無い土師器坏底部。底部はヘラ切りの後未調整である。32、33は土師器皿である。33の底部はヘラ切りの後ナデを施すか。34から38は土師器の甕である。34、35、36、38はいずれも大きく開く口縁部を持ち、胴部内面をヘラ削りする。38は外面に煤が付着している。37は器形が異なるが、内面の屈曲部以下をヘラ削りしており、やはり小形の甕であろう。39は玄界灘式製塩土器と考えられる。外面に目の粗い擬格子叩き、内面に平行線文の当て具痕が見られる。40、41は土師器高坏である。色調や調整はよく似ている

が別個体である。外面は回転ヘラ削り、内面には絞り痕が見られる。明赤褐色を呈するが、焼成は硬質で、須恵器とするべきかもしれない。Fig.7の42、43、44は土師器の把手である。大きく上方へ反る42、43の様なものと、短く水平な44のようなものがある。45は土師質の摺鉢で、中世以降のものと考えられる。上層からの混入であろう。46、47は石製品である。46は調査区内の撹乱から出土した石鏃である。縄文時代に属するものと考えられる。遺跡周辺では該期の遺構は検出されていないが、最近南本町で行われている麦野B遺跡3次調査において、縄文時代の落とし穴ではないかとされる遺構が検出されているという。縄文時代の遺物が出土していないので時期比定には疑問が残るが、遺跡周辺に縄文時代に遡る生活遺構が存在した可能性がでてきたことになろう。47は包含層出土の滑石製品。石鍋の口縁部破片か。内外面に削りの痕が見られる。外面は平滑でああるが、内面は凹凸が著しい。45と同様上層からの混入品であろう。

4．小結

今回の調査では奈良時代を中心とした集落のごく一部を検出した。従ってこの遺跡のみでまとめを行っても、余り大きな意味があるとは思えないが、気付いた点を二、三記しておきたい。

まず数少ない遺構ながら、切り合いと、出土遺物により、少なくとも二時期に分かれる可能性がある。前段階は土壙3、4、溝105からなる遺構群である。土壙3が住居跡に切られること、土壙、溝出土の遺物が、住居のものよりやや古い特徴が見られることによる。後段階は住居の時期で、更に切り合いから新旧2段階に分かれるが、出土遺物からは時期差は小さいものと考えられる。遺物については牛頸等の成果を参考にすると、前段階が8世紀の前半頃、後段階が8世紀中頃ないし後半頃に比定できようか。

近年麦野、雑餉隈周辺の遺跡群の調査が急増しており、調査成果の蓄積も増えてきている。現在までの状況を概観すると、南八幡遺跡1～3次調査のように古墳時代から集落が続く地点もあるが、多くは奈良時代、それも初頭ではなく、やや時期が下がった頃から住居が急増するようである。またほとんどの集落で、平安時代まで継続する例もないようである。その背景には興味を感じるが、現在雑餉隈遺跡5次、8次、9次調査の60基近い住居の資料が未検討であるため、改めて考察することとしたい。

(1) 調査区全景（西から）

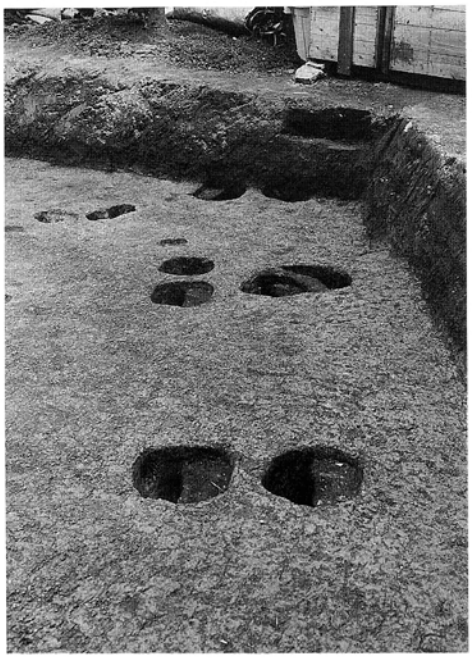
(2) 調査区全景（北から）

(1) 住居跡1、2土層

(2) 住居跡1、2（北から）

(3) 住居跡1、2（東から）

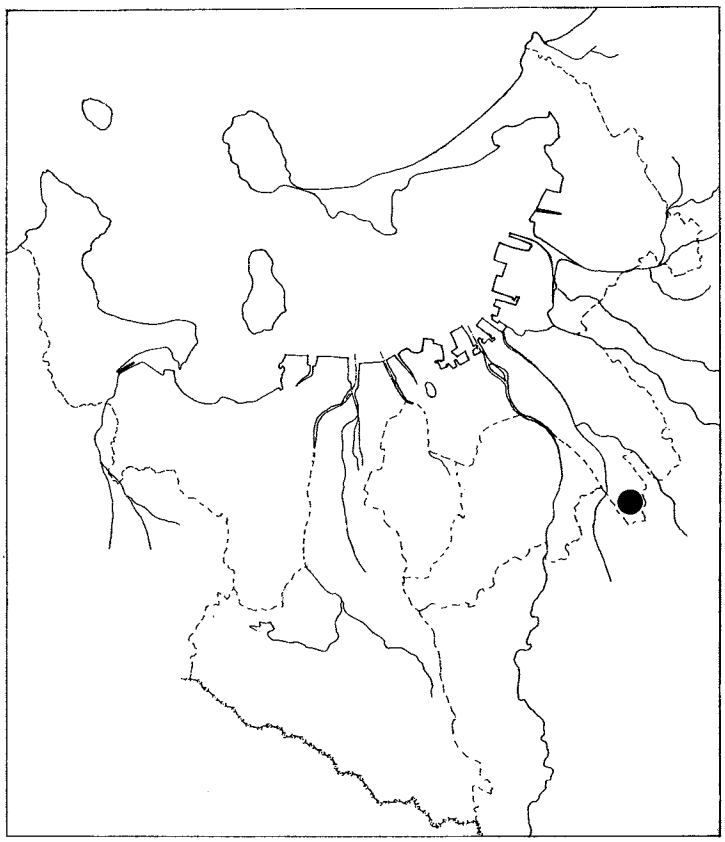
(4) 住居跡2（東から）



(5) 柱列1、2

南八幡遺跡

——— 第6次調査 ———



遺跡略号　MHM－6
調査番号　9508

例　言

1．本章は、１９９５年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した南八幡遺跡第６次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。

2．本章に使用した遺構の実測は加藤隆也が、遺物の実測図は加藤、入江のり子が行った。製図は加藤、入江が行った。

3．本章に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。

4．遺構の呼称は記号化し竪穴住居をＳＣ、土坑をＳＫ、柱穴をＳＰとした。

5．本章で用いる方位は全て磁北である。また、遺構レベルは那珂南小学校（Ｌ＝20.979m）から移動した。

6．本章の執筆は加藤が行った。

7．本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	９５０８		遺跡番号	ＭＨＭ－６	
調査地地番	博多区元町１丁目19－４		分布地図番号	麦野１２	
開発面積	349.03㎡	調査対象面積	349.03㎡	調査実施面積	206㎡
調査期間	1995年５月16日～５月25日				

第三章　南八幡遺跡第６次調査

はじめに

調査に至る経緯

1995年３月３日、博多区元町１丁目19-1における共同住宅の建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの南八幡遺跡群の東側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1995年５月２日に試掘調査を実施した。現況は宅地であり、調査の結果、地表土直下の鳥栖ローム上面にて遺構が確認された。よって、面積349.03㎡を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1995年５月16日～同年５月25日まで行った。

調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛（前）町田英俊（現）
調査総括　文化財部長　　後藤直
　　埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
　　埋蔵文化財課第２係長　山口譲治
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基
調査担当　埋蔵文化財課第２係　加藤隆也
試掘調査　山崎龍雄　池田祐司

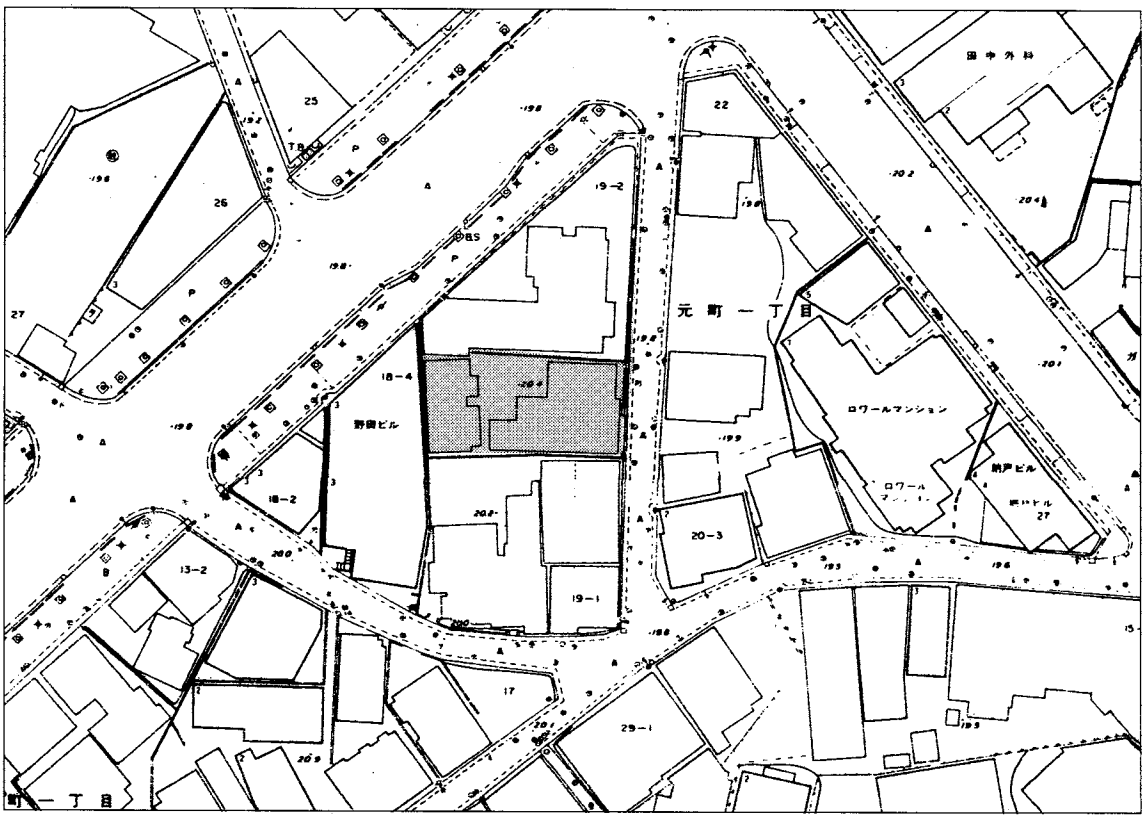


Fig. 9　調査地点位置図（１／1000）

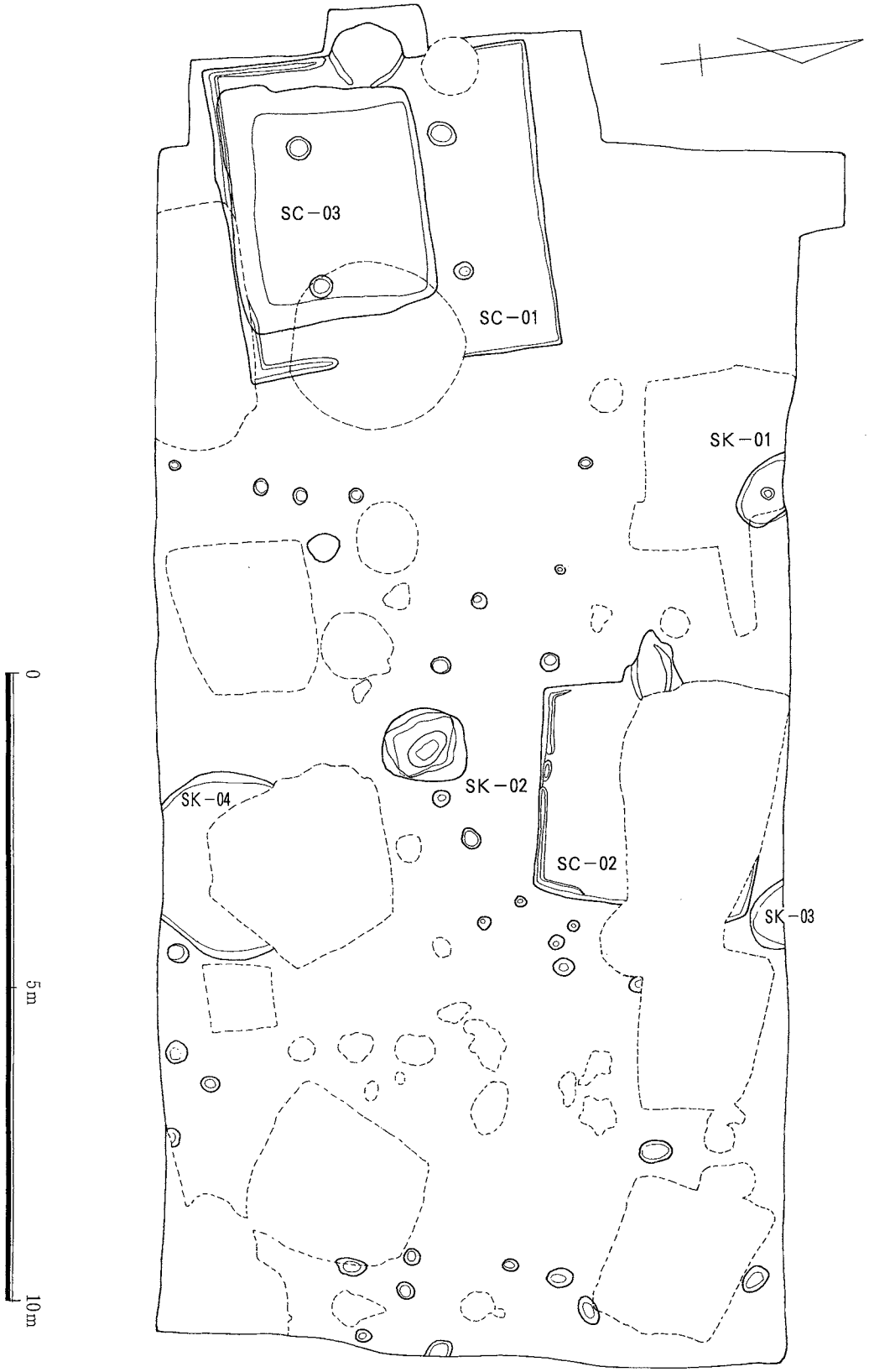


Fig. 10　南八幡遺跡群第6次調査区遺構配置図（1／100）

南八幡遺跡群の既調査

1次調査（1979年調査、南八幡2丁目8-5）

古墳時代の溝が調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第489集）

2次調査（1984年調査、寿町2丁目119-1）

古墳時代の竪穴住居5基、土坑1基、奈良時代の竪穴住居4基、土坑2基、掘立柱建物4棟が調査された。また、ローム層から黒曜石剥片が出土している。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集）

3次調査（1896年調査、寿町2丁目4-12）

古墳時代の竪穴住居2基、奈良時代の竪穴住居4基、土坑4基、掘立柱建物4棟が調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第181集）

4次調査（1991年調査、寿町2丁目86番1、85番2）

竪穴住居状遺構3基、掘立柱建物13棟検出された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第277集）

5次調査（1994年調査、寿町2丁目84番,85番1）

弥生時代後期の竪穴住居が1基調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第441集）

調査の記録

1）竪穴住居（ＳＣ）

今回の調査において3基の竪穴住居を調査した。

ＳＣ－０１（Fig.11、ＰＬ.3）

調査区西側に位置する。住居の東側は攪乱により切られる。5.0m四方の方形の平面形を呈する。住居の四隅はほぼ直角におれ、壁高は70cmを測る。床面南側にのみ浅い壁溝がみられた。西壁やや北よりに白色粘土を貼り付けたカマドがみとめられ、住居内の床面には焚口とみられる浅い楕円形の窪みが検出された。また、カマド付近の床面にはカマドに使った白色粘土塊が散乱していた。主柱穴は四本で、深さは24～64cmを測る。年代は遺物より8世紀中頃から後半とみられる。

出土遺物（Fig.12、ＰＬ.6）

1は須恵器の無高台の坏である。口径12.8cm、底径8.2cm、器高4.0cmを測る。底部は丸みをもち、体部は直線的に外上方にのびる。2～4は須恵器の皿である。2は口径18.0cm、底径14.2cm、器高2.3cmを測る。底は平坦である。3は口径18.0cm、底径14.6cm、器高2.7cmを測る。底は丸みを帯びている。4は口径18.0cm、底径15.2cm、器高2.6cmを測る。底は丸みを帯びている。5～9は須恵器の高台付坏である。5は口径12.6cm、底径6.2cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのびる。6は口径12.6cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境は丸く不明瞭である。体部は直線的に外上方にのび、口縁部はやや外方にひらく。7は口径11.8cm、底径7.0cm、器高3.6cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、体部は直線的に外上方にのびる。8は口径13.4cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境は丸く不明瞭である。体部はわずかに内湾する。9は口径13.7cm、底径8.2cm、器高4.6cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのびる。10は須恵器の蓋である。口径16.8cm、器高2.7cmを測る。天井部は回転ヘラ削りである。11～19は須恵器の坏蓋である。11は口径16.2cm、器高2.4cmを測る。天井部外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。12は口径13.8cm、器高1.6cmを測る。天井部は低く水平で円筒形状のつまみがつく。体部

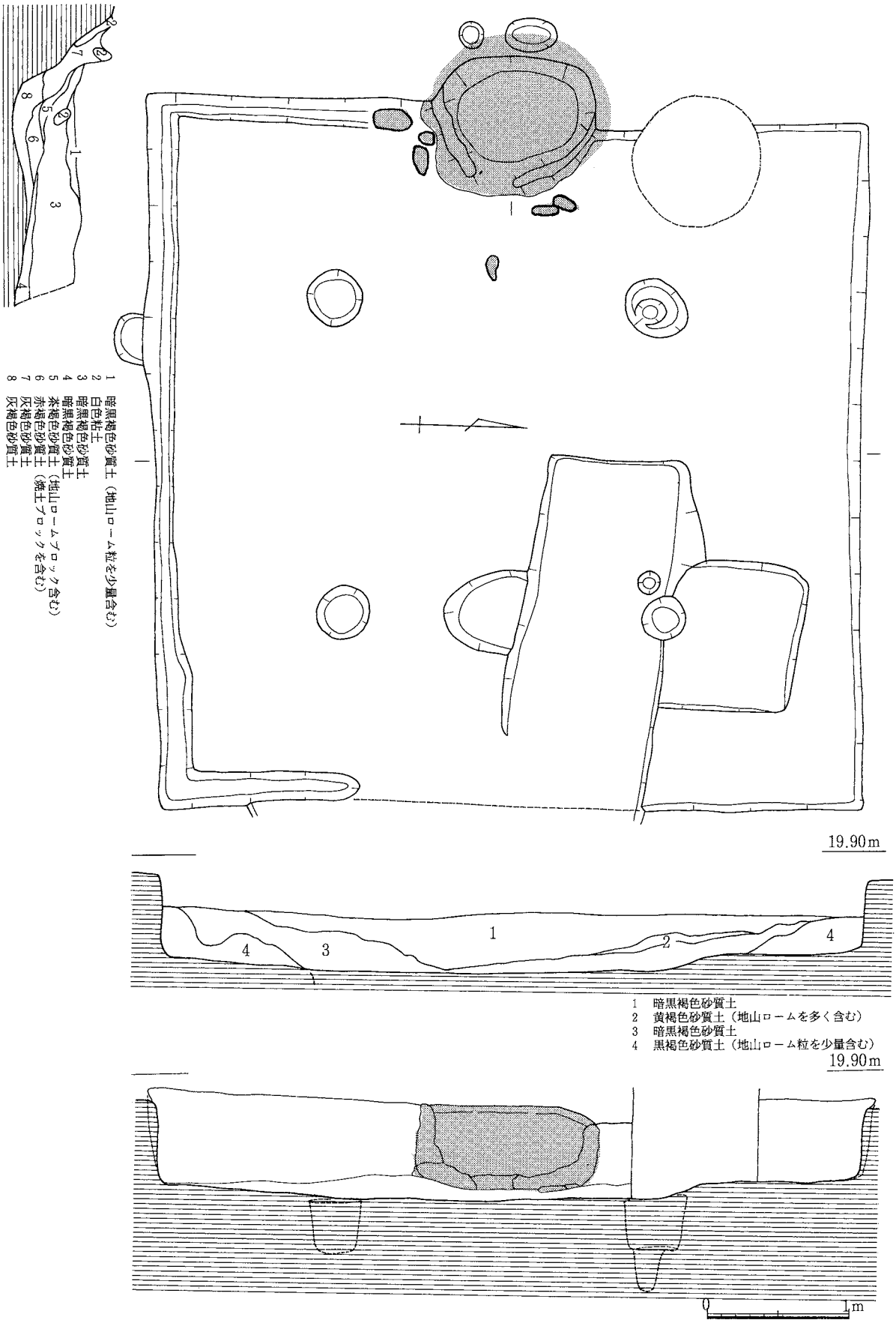


Fig. 11　ＳＣ－０１実測図（１／40）

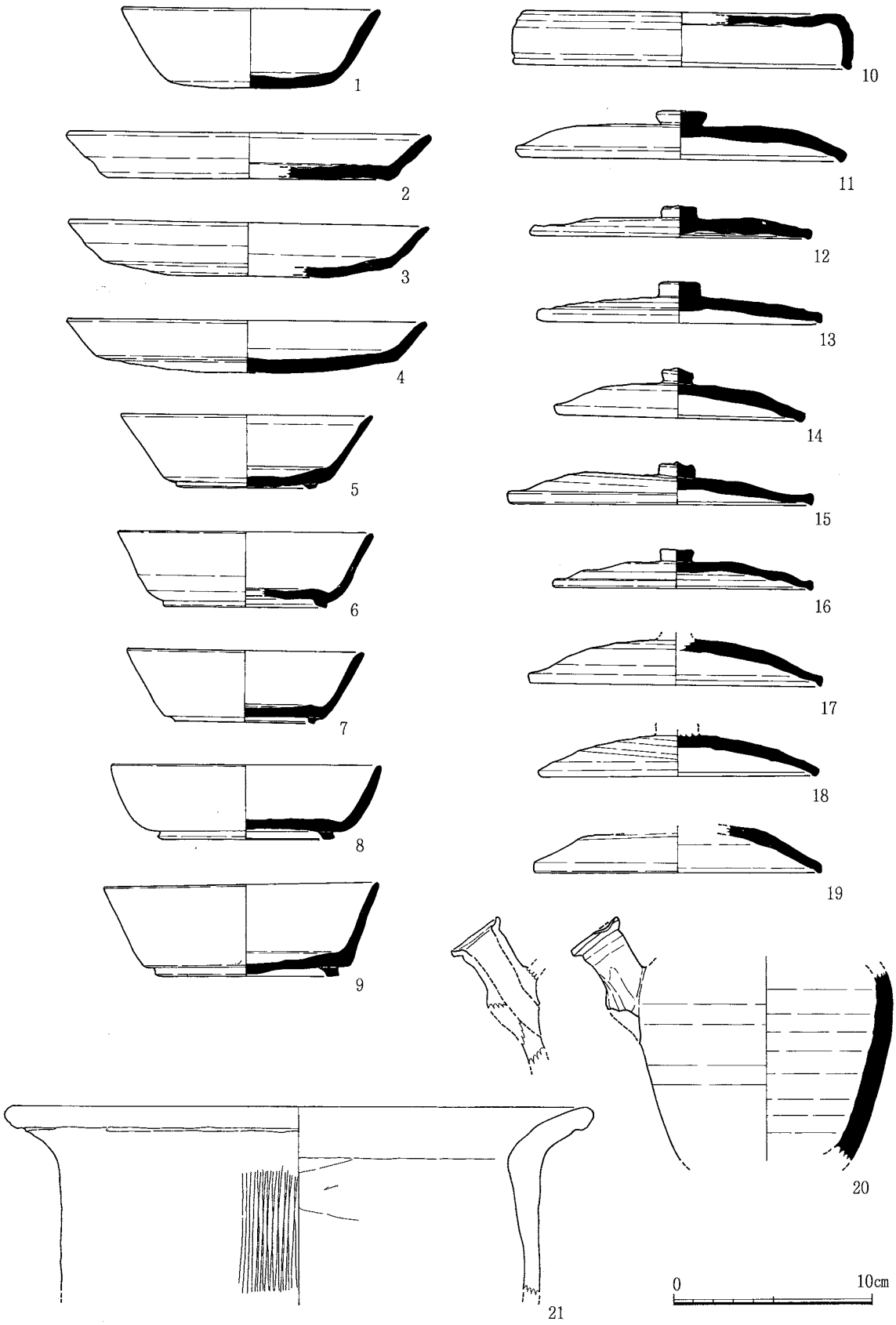


Fig. 12　ＳＣ－０１出土遺物（１／３）

と口縁部の内側の稜は不明瞭である。13は口径14.2cm、器高2.1cmを測る。天井部は低く水平で円筒形状のつまみがつく。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。14は口径12.3cm、器高2.5cmを測る。天井部は高く、丸味をもつ。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。15は口径15.0cm、器高2.1cmを測る。天井部外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっており、円筒形状のつまみがつく。口縁部の断面は三角形に近い。16は口径12.8cm、器高2.0cmを測る。天井部外面の約2／3に回転ヘラ削りをおこなっている。口縁部の断面は三角形に近い。17は口径14.6cm、器高2.3cmを測る。天井部は高く丸味をもち、外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。18は口径13.8cm、器高2.1cmを測る。天井部は高く丸味をもち、外面の約2／3に回転ヘラ削りをおこなっている。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。19は口径14.4cmを測る。天井部外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。20は須恵器水瓶の軍持である。添水口の口径は3.0cmを測る。21は甕である。口径23.8cmを測る。器面調整は外面がハケ目、内面はヘラ削りである。

ＳＣ－０２（Fig.13、ＰＬ.４）

調査区北側に位置し、北側半分を攪乱に切られる。一辺3.5ｍの方形の平面形を呈すると考えられる。残存する深さは約40cmを測る。床面の壁際には幅10cm前後、深さ３～４cmの壁溝がめぐる。西壁の中央に白色粘土を貼り付けたカマドがみられ、煙道は緩やかにのびている。床面上には焚口の浅い窪みが検出され、焼土、白色粘土が広い範囲にみられた。明確な主柱穴は検出されなかったが、床面の隅に直径30cm前後、深さ５～10cmの浅いピットが検出されている。年代は遺物より８世紀前半から中頃とみられる。

出土遺物

須恵器の坏蓋・坏身、大型容器、土師器の甕の口縁部などの破片が埋土から出土しているが、図化できるものはなかった。須恵器高台付坏の高台断面は四角形で細く、底部と体部の境は丸く稜は不明瞭である。甕の破片の器面調整は外面がハケ目、内面はヘラ削りである。

ＳＣ－０３（Fig.14、ＰＬ.4）

ＳＣ－０１の床面の下から検出された遺構である。南北3.2ｍ、東西3.6ｍの長方形を呈する。床面から遺構検出面までは1.15ｍを測る。床面では主柱穴等の建物に伴うとみられる柱穴やカマドに使用される白色粘土塊等は検出されなかった。床面上面に藁のような植物遺体がみられたが取り上げることはできなかった。年代は８世紀中頃であろう。

出土遺物　（Fig16、ＰＬ.6）

22は口径12.2cm、底径8.3cm、器高3.1cmを測る無高台の坏である。底部は平坦で、体部はわずかに内湾気味に外反する。23～25は須恵器の蓋坏の身である。23は底径9.0cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境は丸く稜は不明瞭である。体部は直線的に外上方にのびる。24は底径8.2cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。25は口径16.4cm、底径9.4cm、器高4.5cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は内湾気味に外反する。

2）土坑（ＳＫ）

今回の調査において４基の土坑を調査した。ＳＫ－１～３の３基は無遺物であった。

ＳＫ－０１（Fig.15、ＰＬ.5）

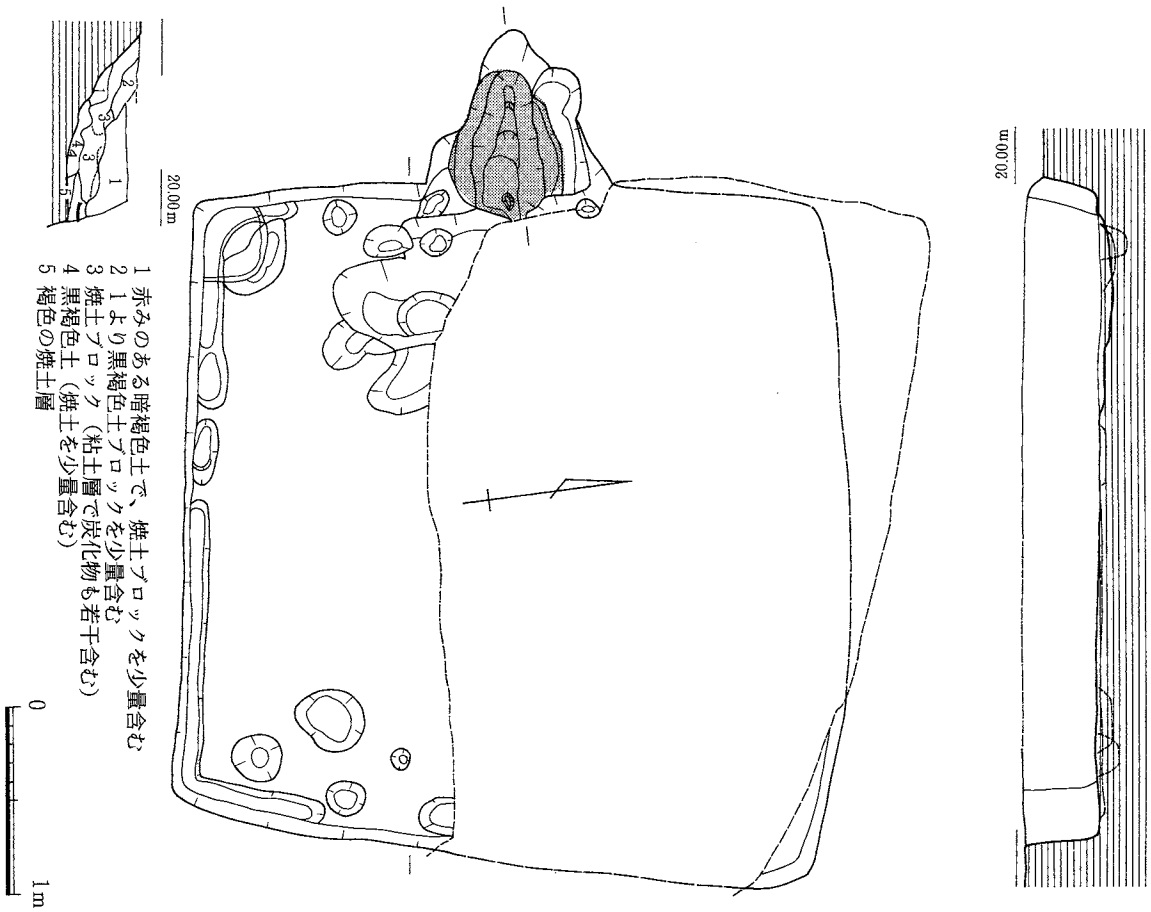


Fig. 13　ＳＣ－０２実測図（1／40）

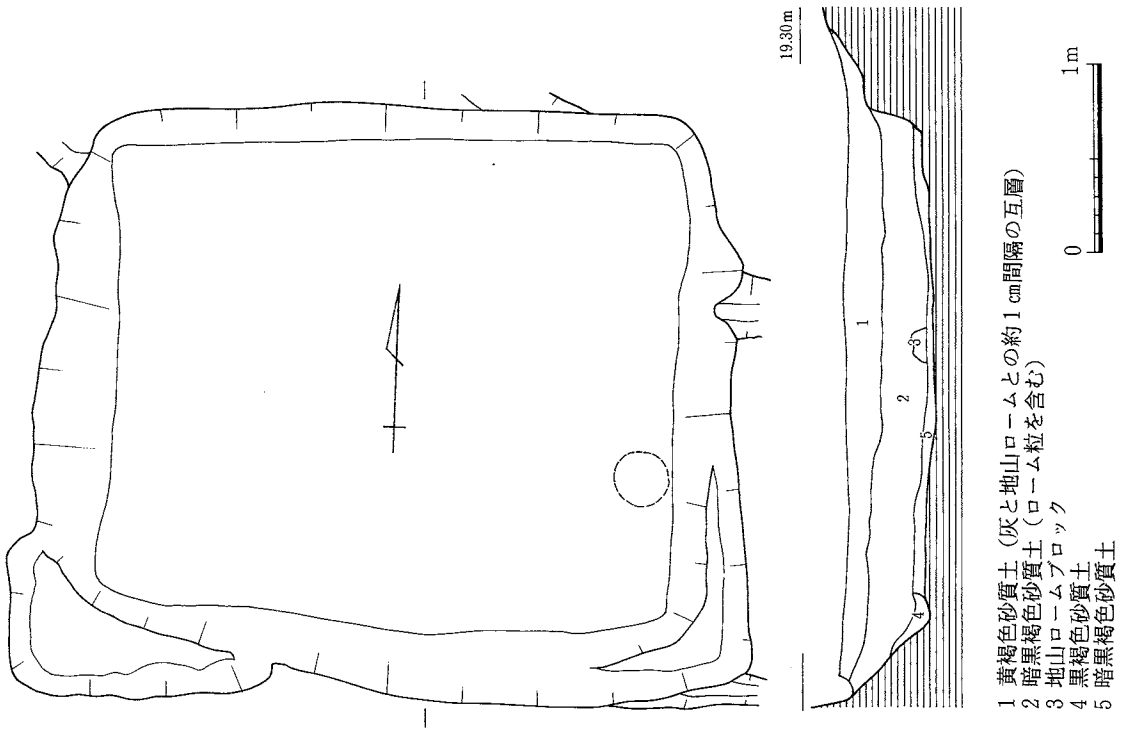
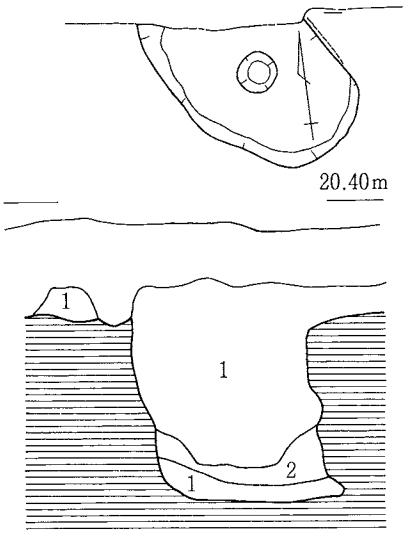
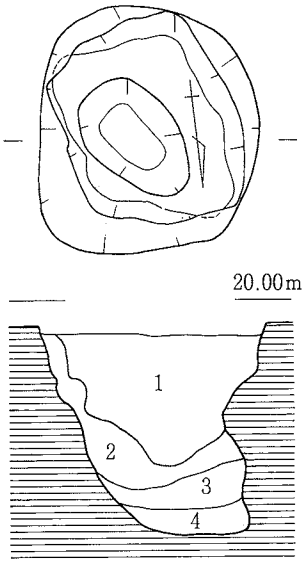


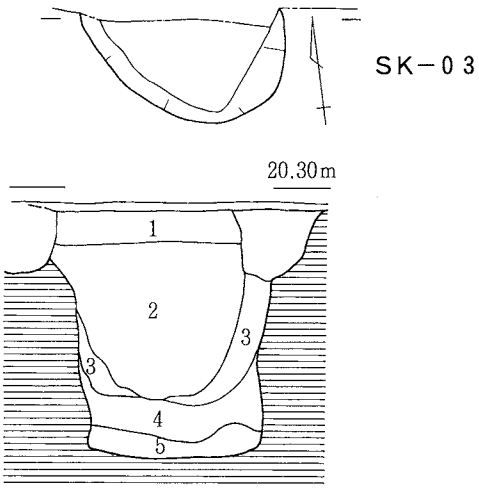
Fig. 14　ＳＣ－０３実測図（1／40）



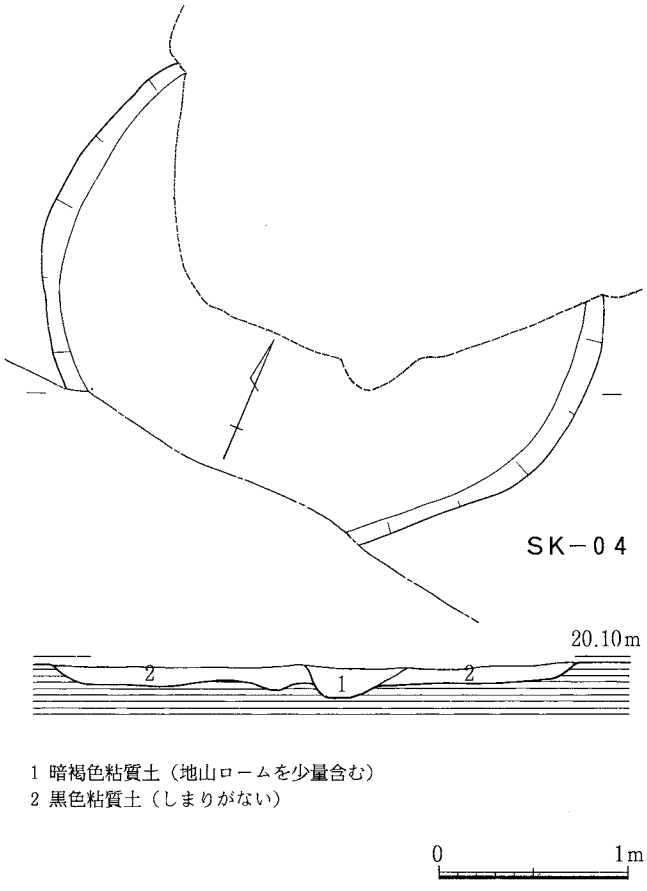
1 暗黒褐色砂質土層
2 明灰褐色砂質土層
3 暗黒褐色砂質土層



1 黒色砂質土（粘性が強く、粒子が密。下位ほど色が淡く、褐色味を増す）
2 暗褐色ロームブロックに黒褐色砂質土が少量混入
3 暗褐色ロームブロックと黒色土の混合
4 暗橙色ロームブロックに黒色土ブロックを少量含む
（粘性が強く、下層は地山ロームブロックが多くなる）



1 暗褐色土（粘性が強い）表土か？
2 暗褐色砂質土（粘性が強く、粒子が細かい）
3 黒褐色砂質土（粘性が強く、地山ローム粒を少量含む）
4 暗褐色ロームブロックに3が混入する（赤みがやや強い）
5 2に暗褐色ロームブロックが混入



1 暗褐色粘質土（地山ロームを少量含む）
2 黒色粘質土（しまりがない）

Fig. 15　土坑（ＳＫ）実測図（１／40）

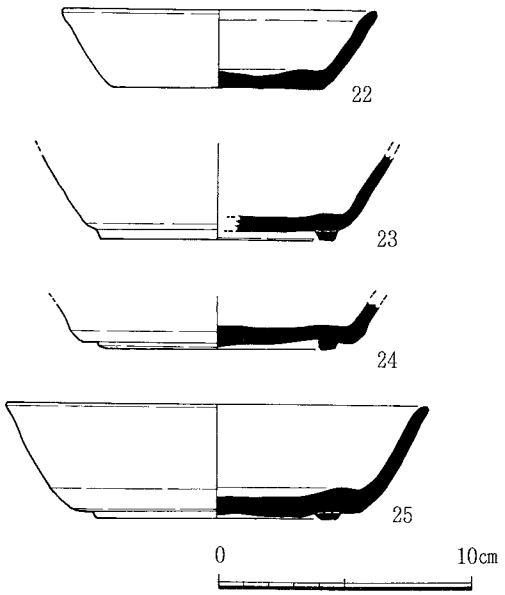


Fig. 16　ＳＣ－０３出土遺物実測図（１／３）

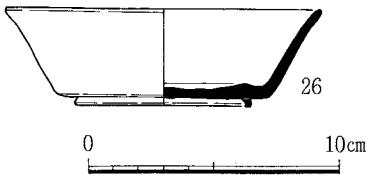


Fig. 17　ＳＫ－０４出土遺物実測図（１／３）

調査区北端で検出され、遺構は調査区外へのびる。平面形は長楕円形を呈し、短軸0.8ｍ、深さ1.15ｍを測る。壁面は下方が抉れ、底面に直径20cm、深さ５cmの浅い小穴がみられる。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

ＳＫ－０２（Fig.15、ＰＬ.5）

調査区中央で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.3ｍ、短軸1.2ｍ、深さ1.1ｍを測る。壁面の上方は崩れて広く、下方は抉れている。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

ＳＫ－０３（Fig.15、ＰＬ.5）

調査区北端で検出され、遺構は調査区外へのびる。平面形は長楕円形を呈すると思われ、深さ1.15ｍを測る。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

ＳＫ－０４（Fig.15、ＰＬ.5）

調査区南端で検出され、遺構は南側調査区外へのびる。平面形は直径3.0ｍの円形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかである。遺構の年代は遺物から８世紀前半とみられる。

出土遺物　（Fig.17、ＰＬ.6）

26は高台付坏である。口径12.2cm、底径6.8cm、器高3.8cmを測る。高台は細く、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのび、口縁部は外反する。

3）小　結

ローム上面にて確認された遺構の調査終了後、調査区中央部に２×２ｍのグリッドを２ヶ所設定して地山の鳥栖ローム層を20～30cm掘削を行ったが遺物、遺構等は検出されなかった。今回の調査地点内において旧石器時代人の活動はみられない。

ＳＫ－０１，０２，０３について　深さが１ｍをこえる遺構であるが、遺物は検出されなかった。遺構断面の観察では覆土が３基とも黒褐色土であり、遺構の上部は緩やかに開いている。この２点から意図的に埋められることなく長時間開口していたことが想定される。さらに、平面形とも併せて「落し穴」であるとかんがえる。

小田和利氏の分類に従うとＳＫ－０１は底面に浅いものであるがピットがあり、平面は長方形を呈することからＩａにあたる。ＳＫ－０２は平面形が不定形であるが、掘削時には方形ないしは、長方形に掘られたであろうと思われる。よって、Ⅲｂにあてる。ＳＫ－０３は調査区端に位置するため平面形は特定できないが方形ないし長方形を呈すると考えられる。

つづいて配列状態であるが、遺構から遺物が出土していないため３基が同時期に掘られたものであるかどうか決定できない。ただし、０１と０３には方向性に一致がみられる。仮にこの２基が同時期のもであるなら、並列タイプの受動的猟法に関わる遺構であるといえる。

ＳＣ－０１とＳＣ－０３について　ＳＣ－０３の性格は、上面のＳＣ－０１には明瞭なフラットな床面がみられることと、主柱穴はこの住居の覆土上面から掘り込まれていることから、０１の屋内施設とは考えられない。しかし、住居南側の辺の方向が２基とも一致すること、０３埋土には意図的な埋め戻しが土層断面にみられることから、この住居は０１に先行する建物で、住居の拡張のための建て替えを行っていると考える。

最後に、今回の調査は面積的には狭いものであったが、落し穴、奈良時代の竪穴住居など多くの成果を得ることができた。近年の周辺の調査においても落し穴や竪穴住居が調査されており、その配列状態や集落の規模等も今後の調査により明らかになることを望みたい。

（参考文献）

『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書-５-』　福岡県教育委員会　1991

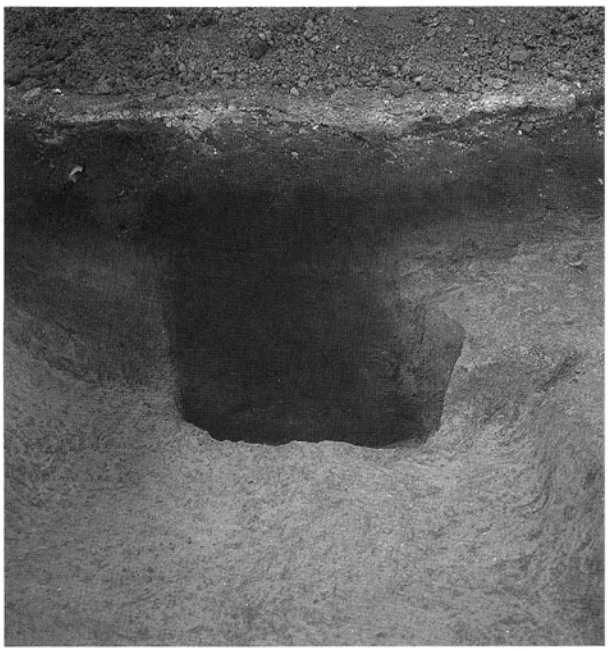
Ｐｈ.１　作　業　風　景

(1) 調査区全景（東から）

(2) ＳＣ－０１完掘状況（東から）

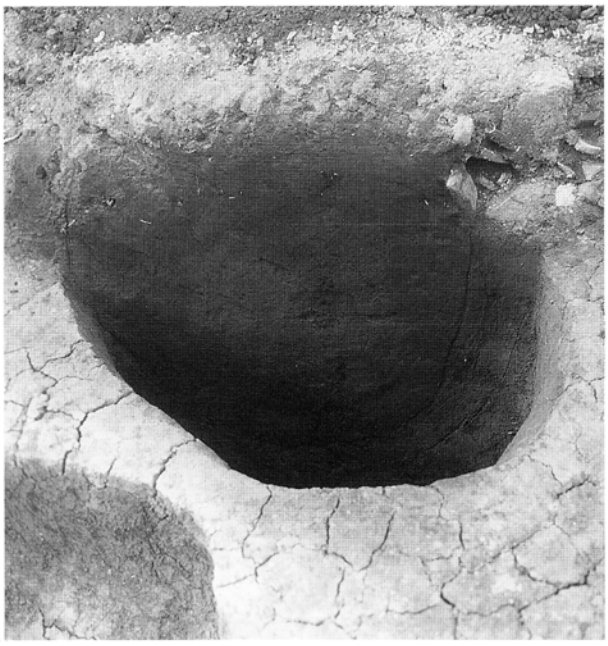
(1)　ＳＣ－０２完掘状況（東から）

(2)　ＳＣ－０３完掘状況（南から）

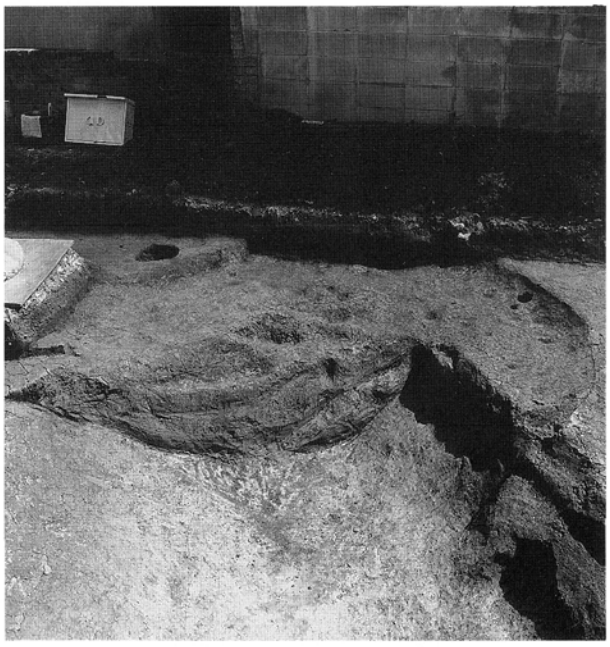


(1)　ＳＫ－０１土層断面（南から）

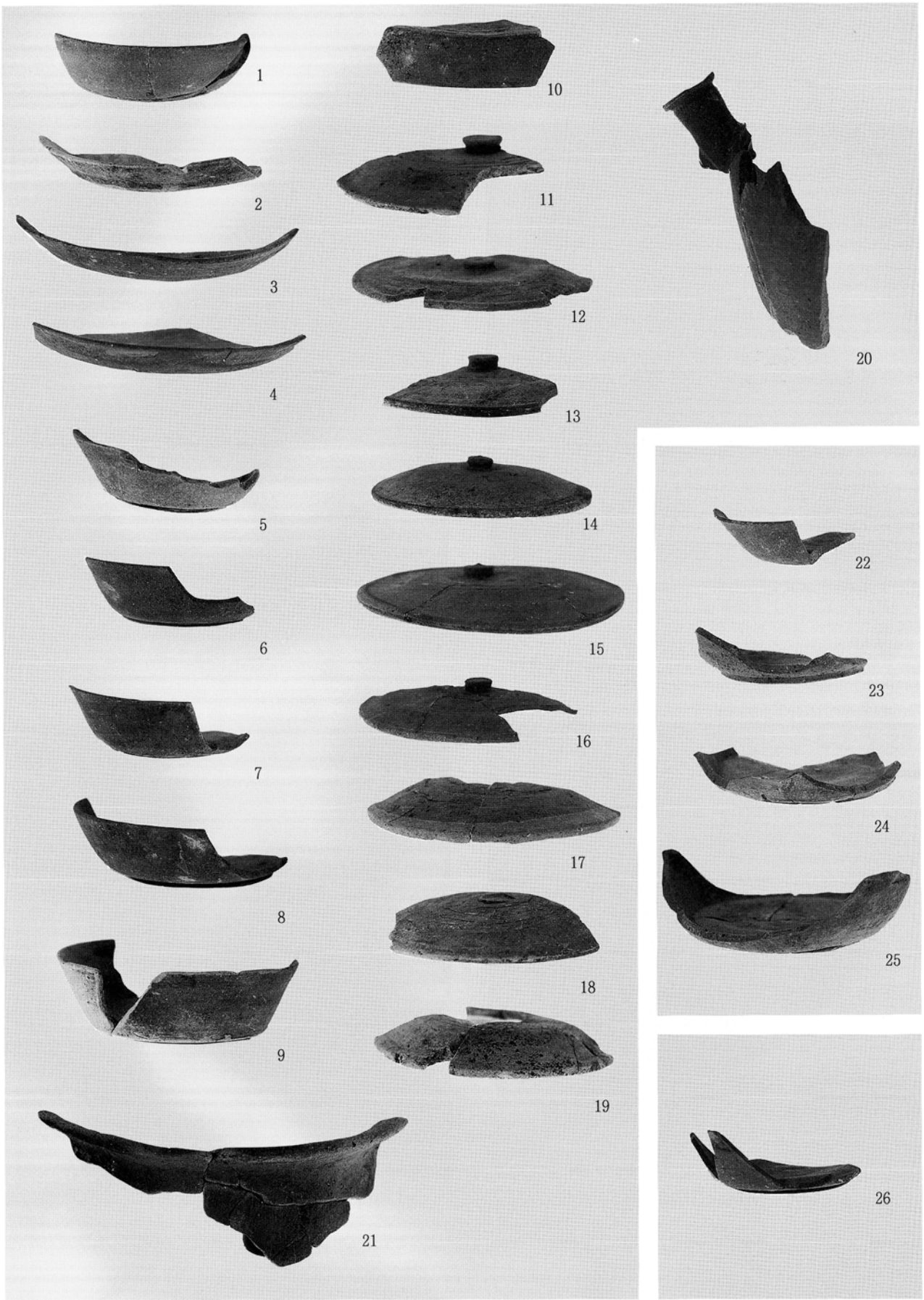
(2)　ＳＫ－０２土層断面（北から）



(3)　ＳＫ－０３土層断面（南から）



(4)　ＳＫ－０４土層断面（北から）



出 土 遺 物

麦野Ｃ、南八幡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　　第501集

1997年３月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　㈱松古堂印刷

麦野C第3次調査
南八幡第6次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第501集

1997

福岡市教育委員会